

### 第3 問題作成部会の見解

#### 1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、大学入試センター試験の枠組みを受け継いだ『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しない。
- 教科としての外国語科の目標である「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」に基づき問題作成を行う。  
また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 問題作成に当たっては、CEFR等を踏まえた力を問うことをねらいとして作成する。  
その際、大学教育の基礎力を踏まえ、また、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し、問題作成を行う。

#### 2 各問題の出題意図と解答結果及び出題に対する反響・意見等についての見解

共通テストを導入して3年目となる今年度の追・再試験においては、本試験と同様に原則として昨年度の出題方針を踏襲し、その問題構成についても変更を加えなかった。すなわち、全体は大問7題から構成されており、第1問から第3問で文法及び語彙の基本的な理解を問い、会話を素材とした第4問、第5問では会話全体の流れ、発話の意図、要点の正確な把握などを多角的に問うことを目指し、読解では第6問、第7問で大意把握や精読など、文章の種類に応じた多様な読みの能力を測ることを意図した。詳細については各問題の報告を参照されたい。

出題に用いたドイツ語の総語数は、本試験とほぼ同等である。この点について、日本独文学会ドイツ語教育部会（以下「ドイツ語教育部会」という。）より、「追・再試験はやや難語が多く含まれている」というご指摘を受けた。また「今年度の本試験と比べると、総語数はほぼ同じであるが、難語がやや多く、しかもその60%（11語中の7語）が大問7に集中しているという点が気になった」という点もご指摘いただいた。その一方で高等学校教科担当教員（以下「教科担当教員」という。）からはこの点について「本試験を基準として準備していた受験者には、分量が抑えられ取り組みやすい印象を受けたのではないか。全体的に口語表現が使われたとしても、状況や場面から類推可能であり、語彙や表現に一定の配慮を感じる」というコメントを頂いている。この捉え方の違いは対象とする学習者をどう想定するかで異なることが伺える。

使用語彙に関しては、例年同様に、高等学校3年間で学ぶ範囲を中心とし、それを超えると考えられるものには注や平易な言い換えなどを利用し、受験者への過度の負担をできる限り回避するよう配慮した。熟語表現や文法項目についても、高等学校3年間の学習を踏まえて理解できるものを中心とするよう留意した。この点について、教科担当教員からは、「昨年度、この場で指摘した、類推不可能な口語表現はなかった」という指摘を頂いた。

なお、平均点等の情報については、追・再試験は受験者が少ないため、公表していない。それゆえ、本試験との難度の違いや過年度の問題との比較は単純にできないが、問題作成に際しては、問題構成・出題数のみならず、難易度についても本試験と同程度であるように努めた。

設問構成と出題形式については、「思考力、判断力、表現力等」を含め、ドイツ語を用いたコミュニケーションで問われる多様な能力を測るという目的に沿って検討を重ね決定している。また、設問のテーマに関して、ドイツ語教育部会から「テーマ選択としては、理想の街を考える生徒達の議論（大問4）、語学学校仲間で行くピクニックの計画（大問5）は、高校生・大学生も日本やドイツ

語圏で経験する可能性があり、親近感を持って読むことができたのではないだろうか」というコメントを頂いた。今後はレベルの更なる適正化を図りたい。

問題構成について、分野別の設問数及び配点は次のとおりである。

発音・文法	第1問～第3問	19問	65点
会話・コミュニケーション	第4問～第5問	13問	70点
読解	第6問～第7問	12問	65点

第1問 第1問は主として単語レベルでの基礎的な発音、文法、語彙の知識を問う問題である。問1～問3は発音に関する問題である。問2では今回初めて、同一文中に現れる子音の発音について問うたが、教科担当教員からは「良問」との評価を得た。問4、問5は動詞の語形変化の問題である。問6では名詞の複数形の語尾を問うた。問7は、日常的に使用頻度の高い名詞の意味に関する知識を問う問題とした。教科担当教員は「若干の差ではあるが、本試験より取り組みやすい印象を受けた」ようであるが、ドイツ語教育部会からは「重要な基本事項の理解度を確認するうえで総じてよく練られた問題である」との評価を得た。

第2問 第2問は実際にドイツ語を運用する日常的な場面において、文の理解を前提にして個々の文法知識及び使用頻度の高い重要な語彙の知識を問う問題である。文法の知識を正確に運用できるかどうかを識別するため、基本的なものからやや難度が高いものまでを出題し、難易度のバランスを工夫した。ドイツ語教育部会からは「本試験と比較して、難度は同等」、教科担当教員からは「文法事項を着実に、正確に学んだ受験者であれば正答を選ぶことができる。本試験よりも基本的な出題に感じる。」とのコメントを得た。

第3問 第3問は与えられた語を適切に配置させることで、様々な文法知識や熟語表現を多層的に問う問題である。昨年度と同様に今年度も設問数は4とした。また、6つの選択肢から5つのみを用いる出題形式を採っている。共通テストの趣旨に鑑み、ドイツ語運用能力を総合的に問うことが目的であり、教科担当教員からも、受験者が文を構成することにより、表現力を問うことができる設問であるという肯定的な評価を得ている。各問のテーマは日常的な話題から選ぶよう配慮したつもりだが、ドイツ語教育部会からは、本試験に比べ「追・再試験では、日常にもよく使われるものの、前置詞を伴う慣用表現が鍵となる設問が多いという特徴」を指摘された。なお、二つの空欄とも正解しないと得点を得られない点については、今後部分点を認めることも含めて検討の余地があるだろう。

第4問 第4問では、昨年度の共通テストと同様、細切れの設問ではなく一連の会話とすることにより、「日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する」場面設定を行った。Lara, Ben, Melanieの3名が学校で「理想の街」に欲しい施設について議論する前半の会話文に続き、後半では、帰宅したLaraが両親と同じ話題について会話をする構成をとった。教科担当教員から「生徒・学生が登場人物となっており、受験者にとって想像のつきやすい身近な場面設定」で「場面が最初に日本語で説明されているので、状況を理解しやすい」というコメントをいただいたことは、コロナ禍でドイツへの留学が難しかったであろう受験者たちへの問題作成時の配慮の成果と受け取っていただけたようで、有難かった。また、ドイツ語教育部会からは、「会話内容から地図を完成させる問いなど、設問形式に興味深い工夫がなされている」、「語彙の選択は総じて妥当」という評価を頂いたことは、今後の問題作成のレベル設定にも活かしていきたい。

問1は文脈に合った言葉の意味を選択する問題である。問2は前後の文脈を理解したうえで、適する発言を選択する問題とした。正答を導くためには名詞の格や接続法の文法知識も必要となる。問3は文脈に合う単語を選ぶ、語義問題。場面が変わって、Laraの自宅での会話。問4

は会話の中で出てきた施設が地図の中でどこに位置するのかを問うイラスト問題。問5は文脈に合うように慣用表現を空欄補充する問題。ドイツ語教育部会からご提案いただいたように、「テキスト理解の面に焦点を当てるとするならば、dagegen seinは見せておき、それと合致する発言を補わせる設問スタイル」も出題可能であった。今後の問題作成の際には、出題意図と設問スタイルにも注意したい。問6は問題文全体を読んで、Benの考えを選択する問題。会話文後半の下線だが、会話文前半にも目を向けなければならないようにすることで、「全体を見渡して解く出題」を狙った。問7はテキスト全体の内容と合うものを選択する問題。ドイツ語教育部会からも高校評価からも「難度も妥当」との評価を受けて安心した。

第5問 第5問は、ドイツの語学学校に通う二人が、翌週のピクニックについて話す場面から始まり、スマートフォンのアンケート結果を参照しながら対応を考える場面に続く。

問1は文脈に合うように発言を選択する問題。ドイツ語教育部会から「日常に頻出する表現を問う良問」との評価を頂いた。問2は日付と時刻の表現を問う問題。問3は会話内容とスマートフォンのアンケート結果を参照しながら、適切な語群を選択する問題。問4は「提案」に関する慣用表現を問う問題。問5は会話内容に合うようにイラストを選択する問題。問6は会話内容から、行動する順序を時系列に並べる問題。

ドイツ語教育部会から「ドイツ語圏における日常を強く意識した場面設定は、本試験、追・再試験で共通しているが、テキスト構成の面では、本試験が比較的シンプルなものであったのに対し、追・再試験では昨年の本試験第5問に近い複合テキストになっている」という指摘を頂いた。「ドイツ語圏における日常を強く意識した場面設定」は今後の問題作成に当たっても継承していきたいと考えているが、本試験と追・再試験の問題形式に大きな違いができることは、可能な限り避けるように留意しておきたい。

第6問 第6問と第7問が読解問題となっているが、それぞれの設問で用いるテキストを別の文体のもの（今年度においては第6問で物語、第7問で学術的な内容の記事）を用いた。これは、現実のコミュニケーションで必要になる読解力を中心に、多角的に受験者のドイツ語力を測ることを目的としているためである。

第6問は文学作品を題材としたもので、本試験の第6問と比べるとテキストの語彙数は6割程度と少なかったが、その分、状況や内容をしっかり想像しないと解けない問題作成を意識した。物語の場合、動詞は過去形が使われることが多いが、高等学校におけるドイツ語学習の状況を考慮しながら、基礎語彙ないし規則的な過去形に限って使用し(war, versuchte, sagte, fragteなど)、それ以外は完了形への書き換えを行った。また、会話文を多用することで過去形の使用頻度を下げた。

全体的に、本文のストーリーを理解しないと解けない問題になるように努めた。問2のイラスト問題については、ドイツ語教育部会から「それぞれのイラストの違いがより明確であるほうが親切であろう」とのご指摘を頂いたが、間違い探しにならないようにする必要がある一方で、一目見て正解がわかることのないようにしなければならない。イラスト問題の効果的な使用については、今後も検討を続けたい。問5の正答は、テキスト本文で明示されているわけではなく、本文から推察する必要があるが、文学作品の場合は十分に説得力のある読みの可能性をも視野に入れた設問が許容されると考える。

テキストのジャンルについて、ドイツ語教育部会から「本試験とのギャップ」があるのではないかと指摘されている。確かに、第6問の文章のジャンルを比べると、本試験（エッセー風の報告文）と追試験（文学作品）では差が大きいような印象を受けるが、語彙数や難度、第7問との組合せ等を総合的に考えてジャンルを選定した。本試験の第7問は学術的なテキストで

あるが、文学作品の書評をベースにしたものであるため、扱っているテーマに関してバランスは保たれていると考える。

第7問 第7問では、それぞれの段落の記述内容を正確に読み取れるか、また各段落で記述されている内容から全体の内容を有機的に理解できるかを問う問題を作成した。7問のうち5問は、問いと選択肢のいずれもドイツ語にすることで、ドイツ語での表現を正確に読み取れることが前提となる形になっている。

テキストは、人がグループで作業を行うと手抜きをする人が出てくることを社会心理学的立場から論じたものである。受験者にとっても、グループワークでの経験などから理解しやすいテーマであると考えて問題を作成した。このことは高校教員とドイツ語教育部会のいずれも肯定的に評価している。

本テキストのキーワードとなるTausziehenの理解を助けるためにイラストを挿入した意図を、高校教員とドイツ語教育部会のいずれからも評価していただいた。また、内容の性質上やや難しいと思われる語も使用したことから、注をつけて理解を助ける工夫をしているが、このことは高校教員とドイツ語教育部会のいずれも肯定的に評価していただいた。使用語彙の難度がやや高かった分、テキストの語数を少なくしたが、それでも文構造も複雑であることからドイツ語教育部会からはテキストの難度は本試験よりも高いと指摘された。設問に関しては、やや難しめの問題が含まれているものの難問とはいえず、全体としてテキストの内容理解を問う問題としてはおおむね妥当であるとの評価を頂いた。ただ、問6は本試験同様に問5との類似性をドイツ語教育部会から指摘されており、この部分については全体の流れの有機的な連関の理解を問う設問を作るなど、さらなる工夫が今後は求められよう。

### 3 ま と め

現行の学習指導要領においては、英語以外の外国語に関する科目は「英語に関する各科目の目標及び内容等に準じて行うもの」とされ、当該諸言語に応じた明確な指導目標が存在しないなか、事実上共通テストが高等学校の学習目標となっている点に鑑み、問題作成分科会としてはドイツ語学習者の裾野を広げるためにも、問題内容と形式、レベルとバランスに配慮しつつ、更に良問の作成に向けて努力を続けていく所存である。